

学習と生活 1790—1960

——英国成人教育運動史——

Learning and Living 1790-1960

J. F. C. Harrison

監訳 新海英行

訳 英国成人教育史研究会

(旭多貴子・杉本武之・杉野利幸・林恭子・藤江知子)

第2章 (その①)

中産階級像

新しい産業の時代の最も目に見える大きな諸問題は、物質的なものであった。不潔な地下居住、垂れ流しの排水、そして、社会的調査者の調査によって暴かれた極度の貧困と窮乏は、40年代の中産階級の良心を掻き立てた。しかし、究極的には、これらはその新社会の諸問題の最も手に負えないものではなかった。時と共に住宅は改善され、通りは舗装され、下水設備が施され、そして、ここかしこにヴィクトリア時代の繁栄のおこぼれが労働諸階級の人々の上にも滴り落ちた。そうした物質的な諸問題は、鋭敏な同時代の人たちには巨大な問題に思われたが、必要な時間と金と意志があれば解決され得るものであった。人間関係というさらに掴みどころのない諸問題の方がはるかに困惑させるものであった¹。産業の発達した北部の新しい都市において、全く新型のコミュニティが出現した。そこでは、昔からの社会生活の手法が破壊されてしまった。この新しい社会は、伝統文化の分解とより広い技術文明の出現が示す、立場と利害の衝突によって引き裂かれた。助け合いの生活方式のあらゆるレベルでの深刻な欠乏がその新しい町の特徴であった。そして、社会の分解の過程と並行して、その町の社会的格差に基づく、一連の同心円に広がる郊外まで物質的分解が進んだ²。これらの問題解決の主導権は、有力な中産諸階級的手中にあった。そして、彼らは唯一の解決策——社会全体を彼ら自身に似せて作り直す——という解決策しか持っていなかった。自分たちにこうした顕著な成功をもたらした見解と規範と方式は、全ての人々に対しても同様に働くだらう。ただし、自分たちにそうさせてもらえれば、の話であるが。サミュエル・スマイルズは『自助論』の中で次のように断言した。「若干の人々が成っているものに、全ての人々は面倒もなく成れるであろう。同一の手段を取れば同一の

¹ マーガレット・B・ スイメイ (Margaret B. Simey) 著 *Charitable Effort in Liverpool in the Nineteenth Century*(Liverpool, 1952)の、この問題に関する刺激的な討論を参照せよ。

² それは、ブロックとモルタルの問題以上の「住宅問題」を作り出した。ジェイムズ・ハウルの *The Homes of the Working Classes, with suggestions for their improvement* (1866); と F.エンゲルス (F.Engels) の『*The Housing Question*(1872).を参照せよ。

結果が付いてくるだろう」。それは、後の時代が、社会的コミュニケーションとして認識するようになったものの中に存在する一つの問題であった。それには、成人教育が著しく適した方策であるように思われた。

1. リテラシーの必要性

初期の産業社会は、それ以前のいかなる時代よりもはるかに大きな程度まで、書き言葉に基づいていた。印刷という社会化の諸機能は早くから認識されていた。そして、「言葉のムチ」はその新社会形成の非常に強力な作用因であった。印刷は労働に対する伝統的な態度を破壊し、そのかわりに新しい規範と目標を用いることを推進した。昔の半農村的な人々の労働形態は工場時代の要求に適合しなかった。「聖月曜日」の諸慣習は、工場労働者の規則的で信頼できる集団の規律に置き換えられなければならなかった。これは易しい課題ではなかったし、一世代で成し遂げられたのでもなかった。強制は、厳格な工場規制から、自己修養というスマイルズ主義の教え込みまで、さまざまな形で利用され、行われた。長い目で見れば、後者は極めて効果的であった。というのは、それは人に何を為すべきか、どんな者に成ればよいのか、といった内的道標を与えたからであった。デイビッド・リースマン (David Riesman) の言葉によると、それは、人を伝統志向から内部志向へ変えた³。

完遂されるべき課題は二重のものであった。つまり、古いものを壊し、新しいものを広めることであった。労働諸階級の人々は、「社会の現状」(*status quo*)にできる限り迅速に自らを適応しさえすれば、直ぐ近くまで来ている「良き時代の到来」の中で十分に利益を得るだろう、と確信させられねばならなかった。伝統的な社会諸習慣や風習は、産業生活の新しいパターンに適合することは殆ど無かった。それゆえ、それらは進歩に対する障害物として拒絶されねばならなかった。製造業の都市において、多くの労働住民は、田舎の民衆文化にあった根元と事実上関係を断ち、工場生活の日課に慣らされ、次第に新しい風潮に自身を順応させていった。古い民衆文化の解体と、三つの R に基づく正規の文字中心の「知的教育」に替えることが、多くの中産階級の教育者たちが意識していた目的であった。民衆の伝統的な諸習慣は、「村のおどけと不作法の娯楽⁴」であるとして非難された。そして、彼らの純朴な文化は、無知で迷信的なもの——工業技術と科学の脅威が日ごとに明白になった時代に全く通用しないもの——としてさげすまれた。禁酒運動は、仕事で、家庭の中で、祭礼で、といった民衆の生活の多くの面に深く織り込まれていた習慣的な飲酒に対する直接的な攻撃によって同じ目的に貢献した。労働諸階級の人々の「知的、道徳的向上」を促進しようとする中産階級の活動の大半は、成人教育を含め、初期と中期ヴィクトリア時代のイングランドにおいては、本質的には、労働諸階級の人々が、この新しい社会の中に自身をより完全に融合させるのを助ける試みであった。

この同化の過程は、真に民衆的な教育原理が欠如していることによって間接的に促進させられた。それは、中産階級の「知的教育」の理想に代わるものになっていたかもしれな

³ See David Riesman, *The Lonely Crowd* (New Haven, 1950).

⁴ R.W.Hamilton, *The Institutions of Popular Education* (Leeds, 1845), p.118. The Rev.Dr.Richard Winter Hamilton (1794-1848) was an Independent minister of Albion Chapel and later Belgrave chapel, Leeds, and a president of the mechanics' institute.

かった。労働諸階級は、自ら特有の教育イデオロギーを何一つ持っていなかったもので、以前の田舎のイングランドの民衆文化の遺物が何の重要性もないものとして無視された時、彼らは、中産階級の日曜学校と全日学校で提供される知的教育を受け入れざるを得なかったのである。民衆への教育事業は、下からの民衆の要求に応えるものではなかった。諸学校は民衆の教育機関ではなく、むしろ、有力な中産階級の諸見解に従って社会を形成するための道具であった⁵。それは個々の人に文化的な、あるいは情緒的な強化剤を提供するというよりは、主として、社会機構を強化するために計画された教育であった。そして、それは殆ど専ら、読み書きの観点から考えられたものであった。労働諸階級の人々は、間もなく、この世で「成功する」ためには、人はまず初めに読むことと書くことができなくてはならないと気付かされた。

労働諸階級の間におけるかなり広範囲な非識字が、相当な量の様々な種類の篤志的な教育活動にも拘らず、1860年まで存在していたことは、結婚登録の統計から明らかである。織工のジョウゼフ・ブルック (Joseph Brook) は、1839年にブラッドフォードでは成人の織工の2/3は読むことができたが、書くことができた者は1/4を超えてはいなかった、と推測した⁶。このことは主に不十分な初等教育に依るものであった。だが、サミュエル・スマイルズは、読み書き計算を実際に行わないこともまた、相当な数の非識字への転落の理由を説明する、という意見を出した⁷。スクール・ペンス (school pence)⁸がまさに出現しようとし、そして親が何年かの間、子どもが得る収入の助けを借りないで生活して行くことを厭わず、且つそれが可能な時でさえも、その制限された初等教育カリキュラムとでたらめな計画運営は、良くて、一定程度の量の「知的教育」を提供するだけであって、真の教育を提供することは殆ど無かった。さらに、多くの場合、その「有用性」さえも、その子の低年齢と短い就学期間が制限した。1855年に、ヨークシャーに在ったイングランド国教会の学校にいた子どもの79%が10歳以下であった。13歳以上の子どもは5%を超えてはいなかった。69%の子どもが2年以内の間の在学であった⁹。初等教育のための限られた便宜では、労働諸階級の教育的願望は低いままにして置かれる傾向があった。王任手織工調査委員会地域委員たちは次のことを知った。ウェスト・ライディングの織工たちは彼らの子どもたちに教育を受けさせてやりたいという願望を表明したが、実際にはこの願

⁵ See Fred Clarke, *Education and Social Change* (1940), p. 30.

⁶ *Reports from the Assistant Handloom Weavers' Commissioners* (1840), III, 570. また、報告書 'On the conditions of the factory operatives of Bradford' を参照のこと。これは1859年のブラッドフォードで開催された社会科学協会 (Social Science Association) の研究会で、ジョン・ジェイムズ (John James : ブラッドフォード及び梳毛産業の歴史研究者) によって発表されたものである。 *N. A. P. S. S. 紀要*(1859), p. 726.

⁷ *Report of the Select Committee on Public Libraries* (1849), p. 125. スマイルズの証言は、彼のリーズにおける経験に基づいていた。同様な証言が、前の時期のものであるが、メソディストでミクルフィールド (Micklefield) の鍛冶屋のサミュエル・ヒックの生涯に記録されている。James Everett, *The Village Blacksmith; or Piety and Usefulness, exemplified in a memoir of the life of Samuel Hick, late of Micklefield, Yorkeshire* (1830).

⁸ 訳註 週当たり1ペニーから2ペンスほどの授業料。

⁹ *Committee of Council upon Education, Annual Reports* (1855-56), p. 347 - 8. (Report of the Rev. F. Watkins)

望は、彼らの子どもたちを日曜学校に送ることで満足させられた。その上「その親たちは、それをした時に自分の義務を果たした、と考えている」¹⁰。50年代以前の労働諸階級の中に在った教育への関心が功利的なものになるのは殆ど避けられないことであった。なお一層の自由時間が彼らに利用可能になるまで、教養のための教育という古い伝統は、労働諸階級の中では例外的な人以外の誰に対しても意味を持ち得なかった。

完全な非識字の人が労働諸階級の人々のうちで 1/4 か、1/3 ほど存在していたことと、初歩の読み書き能力しか持たない者がそれよりも大きな割合で存在していたことが、中産階級のイデオロギーの普及に対する障壁を成していた。初等授業のための事業の提供の増加は、この難問への主要な対応策であった。しかし、それに加えて多くの実際的な補助策があった。成人教育はその中の一つであった。学齢期を過ぎた人たちのための読み書き計算の教授と練習は、長い間、成人教育運動の主要な機能の一つであった。この再教育という役割は、つまり、初期の教育の欠陥を埋めることは、今日まで、イギリスの成人教育伝統の主要な撚り糸の一つであり続けている。

十分な識字力を備えた社会を作り出すことは、その時代の支配的な原理においては、また必須のことであった。福音主義と功利主義は最低限度の識字能力にさえも価値を置き、それを持つことを奨励した。非識字の人が良いキリスト教徒に成ることは可能であった。しかし、聖書の文を読むことができることは、確かに天国に一層近い位置にいたことであった。リーズのクェーカーたちが言った通りであった。「聖書は確かに天国の知恵の宝庫、神聖な慰めの泉です。しかし、学習をしていない人にとっては、それは鍵の掛けられた宝庫であり、塞がれた泉です」¹¹。こうして、成人学校が「成人貧民が聖書を読むことを助けるという目的で」リーズに 1816 年に創設された。これにも増して功利主義者たちは、社会のために読み書きの基礎を要求した。合理的な訴えが、知的ではあるが読み書きのできない職工たちによって理解され得たこともあったのは疑いないが、この伝達の手順は、書かれた言葉という媒体が無かったことによって、殆ど無効にされた。このことは、ブルームの信奉者によって非常に良く理解されていたので、彼らは、ジョン・ヘンリー・ニューマンによって、「情報」派という仇名を正しくも付けられた¹²。彼らの記念碑はメカニックス・インスティテュートと有用知識普及協会であった。

しかしながら、成人教育を社会的交流の手段として使うことには支払われるべき代償があった。メカニックス・インスティテュートと成人学校は、その利得を享受した一方で、それらはまたその社会的承認に伴う損失を被った。中産諸階級による多くの社会的教育活動が労働階級の独立行動に対する恐怖によって鼓舞されているということを、知的な労働者たちが悟らないでいることは無かった。労働諸階級のうちの識字力を持つ人たちの成長

¹⁰ *Reports* (1840), III, 544.

¹¹ *A Short Account of the Adult Schools in Leeds, supported and conducted by the Society of Friends* (Leeds, 1817), p. 7.

¹² 訳註 ニューマンの『タムワース読書室』 (*The Tamworth Reading Room*) に次の文がある。Lord Brougham... The Knowledge School does not contemplate raising man above himself; it merely aims at disposing of his existing powers and tastes, as is most convenient, or is practicable under circumstances.

[Newman, John Henry Cardinal, *Discussions and Arguments on Various Subjects*, p.272. (Longmans, Green and Co., London, 1918)]

は、急進的で非正統な見解の普及への道を開いた。それ故、非常に多くの成人教育活動が、これを抑えようとした中産階級の願望から派生した。余りにも公然と教育が社会統制の道具の一つとして使われたので、それは怪しまれるようになった。19世紀初期に観察され得る、多くの成人教育組織や機関が活力を失っていたのは、教育が露骨に社会調和という目的だけに向けられていて、その上その学生の人格への真摯な尊敬に基づいていない時には、不可避のことであった。それでもこのことは、この役割における成人教育の有効性の限界であって否定ではない。50年代と60年代に、中産諸階級は、自分たちの理想と規範を、「下層諸階級」の中のいたるところに驚くほど効果的に広めた。彼らは労働諸階級の裕福な部分の中に、リスペクタビリティというゴールを既に設けてしまっていた。このリスペクタビリティという金銀純度検証印は、知識と印刷物への敬意を示すものであった。これが効果的に実施されると、印刷された言葉を媒介にした訴え、主張、そして「道理」の普及に道が開かれた。この過程で、様々な形式の成人教育が、社会順応のための有効な梃になった。

2. 自助と自己向上

一般的な水準を超えて向上する人は誰もが二つの教育を受けて来ている、と言ったのは、ギボン (Gibbon) であった。つまり、第一のものは、他の人による教育であり、第二のものは、これがより重要であるが、自分自身による教育である。ヴィクトリア時代の人々はこのことをしっかりと心に留めていた。「職工諸君よ、自分自身で観察し、思考し、行動することほど重要なことはないと肝に銘じなさい」と、自己教育をした人、ティモシー・クラクストン (Timothy Claxton) は勧めた¹³。また、シャフツベリー伯 (the Earl Shaftesbury) は1859年、ブラッドフォードの社会科学協会 (the Social Science Association) で次のように語った。「人が自分自身に施す教育は、常に最も永続的であり、最も効果的であります」¹⁴。広い意味では、すべての成人教育は、熟練した教師の指導下にあったとしても、本質的に自己教育の一つの過程である。そして、その本来的な価値は、それが学生の努力をどの程度奮い起こしたかによって直に決定されるようである。しかし、よりの確な意味では、自己教育という理念は、成人教育というイギリスの伝統のひとつの確立された部分である。社会的原理である自助の教育経験は、多くの聡明な労働者の側に快く受け入れられた。その理由は、それが古くからの、そして土着の少数集団の伝統と調和していたからである。

注目すべきことは、この少数集団の伝統——言葉の完全な意味において、自己教育のためには殆どどのような代償を払ってもよいと思っていた例外的な職人たちの伝統——の力であった。日刊新聞をすらすらと読める人が「偉大な学識者」とか「学のある人」と考えられるのを常としていた時代であったので、彼らの階級の中の自己教育の労働者たちの感化力と名声は、その人数に全く比例しないほどの社会的重要性を、彼らの階級の成員に与えた¹⁵。彼らは、宗教運動、社会改良運動、そして政治的運動において、民衆のために唯一の土着的な指導力を提供した。同時に彼らは中産階級の理想との一つの接点——社会の

¹³ Timothy Claxton, *Hints to Mechanics on self education and mutual instruction*, 1844(1st edn.1839), p. 7.

¹⁴ *Trans. N.A.P.S.S.*(1859), p. 17.

¹⁵ Lawson, *op.cit.*, p.39.

進歩の豊かな源泉になることもできるが、同時に、危険な曖昧性を創り出すかもしれないという二重の役割を持つもの——であった。ウェスト・ライディングのようないくつかの地域においては、この伝統はとりわけ強かった。このことがヨークシャ人に顕著な性格の特性によっていたとしても、あるいは、より可能性がありそうだが、靴職人、織工、羊毛選別人といったある一定の種類の職業の社会慣習と密接に関係していたとしても、19世紀のヨークシャにおいて、自己努力だけで教養ある人になった職人たちの人数はめざましかった。彼らの中のある者たちは、生涯を通して自分の昔からの仕事に精を出し、その結果「何の某、織工詩人」として知られるようになった。また、ある者たちは、それまでの生活に不満を感じて、ジャーナリズム、政治改革、そしてメソディストの聖職者へと転じた。しかし、彼らの選択が何であれ、ヴィクトリア時代のイングランドの労働階級の人々の社会的活動の中で、彼らは一つの特有の構成要素を成しており、それは、様々な程度の熱心さで見出され、様々な利害関係と諸運動に結びついていた。自己教育の人として有名な労働階級のリーダーたちには、ウィリアム・コベット (William Cobbett)、サミュエル・バンフォード (Samuel Bamford)、ウィリアム・ラヴェット (William Lovett)、そして、トマス・クーパー (Thomas Cooper) といった人たちがいた。彼らは永く人々の記憶の中に生きた。コテージの壁に掛けられた粗末な額縁入りの版画の中に、改革運動の集会とチャーチスト集会の伝説の中に、そして彼らの自叙伝の中に、永く生き続けた。彼らは、教育における自助の有効性に生きた証拠を提供し、成人教育制度のより永続的な形態の機関を設立しようと努めていた人々に希望と激励を与えた。そして、北部の工業諸都市や村々にはヒーローたちがいた。彼らの地元での名声や「困難な状況下での知識探究」における数々の業績は、より有名な人たちの名声や業績に十分に匹敵していた。

そのような人の一人としてジョセフ・バーカー (Joseph Barker) がいた¹⁶。彼は1806年、ブラムリー (Bramley) (リーズ) に手織工の息子として生まれ、父親の仕事場で育てられた。彼の両親は熱烈なメソディストで、救世主による救いと突然の回心という単純な教義を熱心に信仰していた。バーカーの父親は宗教上の回心を得た後に、独習で読み書きを覚えた。しかし、彼の家庭における貧困と失業が、彼の子どもたちを全日学校へ通わせることを妨げた。ジョセフ・バーカーの子ども時代はナポレオン戦争に続く数年間であり、織工の仕事の供給が少なかった。それで「仕事がある時は、我々は非常に懸命に働かねばならなかった」。このようにして、9歳の時からバーカーは、しばしば夜が明ける前から起こされ、糸巻の仕事は夜の9時か10時まで行った。そのような状況においては、日曜学校の他に教育を受ける機会は殆ど無かった。「仕事がある時は学校へ行く時間が無かったし、仕事が無い時は学費を払うための金銭的余裕は全く無かった。それゆえ日曜学校が我々の唯一の源であった」。それにもかかわらず、読むことができるとすぐにバーカーは手に入るものは何でも貪り読み始めた。聖書と『天路歷程 (Pilgrim's Progress)』を手始めに、彼は次のような書物を努力して読み通した。『ミュンヒハウゼン男爵物語 (the Tale of Baron

16 バーカーの生涯に関する詳細は、以下の書に見ることができる。『独自に力を発揮したある男の物語と告白』(Wortley, 1845), 『経験という教授、あるいは人生を通じて学んだ課業』(1869)。新版の『彼自身の記述によるジョセフ・バーカーの生涯』(1880)は、彼の甥のJ.T.バーカーによって編集された。それは早期の2冊の作品を(不適切な箇所を削除し)再刊したものであった。

Munchausen)』、『ロビンソン・クルーソー (*Robinson Crusoe*)』、泥棒や追いはぎの話、ピューリタンの神学 (たとえばバクスター (Baxter) の『改宗していない人への呼びかけ (*Call to the Unconverted*)』や『聖者たちの永遠の安らぎ (*Saints' Everlasting Rest*)』)、有名なメソヂストの説教師たちの生涯、そして聖書の解説書、であった。彼は 16 歳の時、その頃には一日に 12 時間から 16 時間を紡績工として働いていたが、ラテン語とギリシャ語、それに加えて速記法、数学、歴史を学び始めた。彼はこれらの学習を、当時、ブラムリーに配属されていたメソヂストの巡回説教師に助けられ、そしてまた、メソヂストの地区説教師である地元の男性教師にも助けられた。前者には英文法のレッスンを受けるため午前 5 時に訪問し 6 時までいた。そして後者にはラテン語学習の助けを受けるために午前 6 時に訪問し 7 時までいた。紡績機の吊るし台に本をもたせ掛け、昼間の仕事の間中、彼はそれを素早く見ることを巧みに行った。そして仕事の間中ずっとラテン語学習に頭を働かせていた¹⁷。彼はブラムリーの近隣の人々からは何の激励も受けなかった。そして、地区のメソヂストの人々は彼の学習への疑いをあからさまに示した。この桁外れの奮闘にバーカーを駆り立てた動機は、彼の著述からはあまりはっきりと浮かび上がってこない。彼のメソヂストの環境が重要であったことは疑いの余地が無いが (彼は地区説教師になり、それからメソヂスト・ニュー・コネクション (*the Methodist New Connexion*) のための巡回説教師になった)、彼は、後になるまで社会的、政治的関心をはっきり表現することは無かった。第一に、彼は学習への愛、書物を読むという喜び、そしてそれらのための探究によって純粋に駆り立てられていたように思われる。

この自己教育という様式は、初期の工業制の幾分英雄的な時代に特有なものではなかった。半世紀後、ジョセフ・ライト (Joseph Wright) は自己修養への同様な辛く厳しい道を苦しんで進んでいた¹⁸。1855 年にアイドル (Idle) (ブラッドフォード) で絶望的に貧しい両親の息子として生まれた彼は、幼い時はクレイトン (Clayton) の救貧院とアイドルの間だけのコテージで過ごした。彼の母は、ろくでなしの夫に去られて、出来る限りのことをして自分と子ども達を養っていかなければならなかった。そのため、ジョセフは 6 歳の時に地元の石切り場でロバ引きとして働き始めた。7 歳の時、彼はサルティア (Saltaire) にあるタイタス・ソールト卿 (Sir Titus Salt) の紡績工場で、就業年齢未満であったが、「ドッファー」として仕事を始めた。彼は半日工なので工場学校に通ったが、全日労働に就くために早くに学校を辞めた。モデル的な紡績工場と見なされていた所の学校に 3 年か 4 年間通学した後でも (サルティアは長い間、進んだ産業主義の展示見本であった)、彼は読むことも書くことも全く出来ないままであった。彼はアルファベットと生齧りの算数、そして、聖書の幾つかの聖句は学んでいて、それをオウム返しでそらんじることが出来た。しかし、それが彼の成果の全てであった。1870 年に初めて、その時にはライトは羊毛梳き工になっていたのであるが、男達が昼食の時に普仏戦争の新聞記事を読むのを耳にして心動かされ、彼は読み書きすることを独習しようと決心した。これを彼は聖書

¹⁷ 同じような、長い労働時間中の読書と学習時間の獲得は、トマス・クーパー (彼が靴職人の時) によって『トマス・クーパーの生涯』(1872) chap.6,に記述されている。また、ケタリング (Kettering) のベルベット織工の J.A.レザーランド (J.A.Leatherland) によって『短い自叙伝的回想録付きのエッセイと詩』(1862) , p.12.に記述されている。

¹⁸詳細は、E. M. Wright, *The Life of Joseph Wright*, 2 vols.(1932)

と『天路歷程』の助けによって行なった。彼はウェスリー派の全日学校の教師によって運営されている労働青年のための夜間学校に通い始めた。その上さらにカッセル (Cassell) の『通俗教育家 Popular Educator』¹⁹を隔週分冊で購入し、それらを非常な勤勉さで学習した。「その完全本は、何年もの間、常に私のそばにありました。私はそれから非常に多くものを学びました」と彼は言った。このころには学習に対する願望は彼にとって一つの熱情となっていた。日中、彼は割ける限りのわずかな時間を学習に割き、食事の時間は本を読むことに精を出した。そして日曜日はチャペルに出席する以外は全日を学習に費やした。いまや諸言語への渴望が発現し、彼はフランス語、そして次にドイツ語を学んだ。紡績工場での午前6時から午後6時までの長時間労働の後、彼は午前2時までしばしば勉強しながら起きていたものだった。そしてそれからわずか3時間だけ眠り、6時に始まる工場に間に合うよう起きだすのだった。

これらの学習のおかげで、ライトは羊毛梳き作業から、まずは学校教師の職に、そして最終的にはオックスフォード大学比較言語学の教授職に昇進した。彼の経歴は新聞のサクセスストーリー——「救貧院からオックスフォードへ」の要素をすべて有していた。しかし殆どの自己教育の労働者達には、このような目もくらむような経歴など存在しなかった。彼らが急進的なジャーナリズム兼政治という危険に頭を突っ込まなかったなら、彼らは自分の職業を続けるか、あるいはおそらく学校教師として、または優れた事務員として穏当な尊敬を得たであろう。1830年代と40年代における自己教育が労働者にもたらした挑戦と挫折の典型は、ウェスト・ライディングからの三番目の事例——「不運な天才 (Unfortunate Genius)」²⁰である。殆ど典型的に、スマイルズが書いたような貧困状況から出発し、このエアデイルの手織工の息子は正しく話をすることも出来ない頃から学校へ行かされた。——それは教育を受けるためではなく、彼の母親が紡績工として働いている間、彼女の邪魔にならないためであった。8歳の時にレンガ工場で働き始める前に、彼はすでに文字に興味を覚え始め、商店の看板の文字を模写することで書き方を独学しようと試みた。彼は日曜学校に通ったが、黒板や教師を見ることも出来ないほど強度の近視であったため、殆ど何も学んでいなかった。11歳の時、彼はレンガ工場をやめ「上等なブロード布を織る仕事に就かされ」、そして一日14時間から16時間織機の前で働いた。自己教育への願望がこの時、彼の中で火が付き始め、彼は再び日曜学校に参加し、今回はより有益な成果が上がった。彼は家中の本全て——フォリオ版の聖書の断片、バニヤン、『若者の友』の一冊（この本から彼は数学を学んだ）、そしてヒル (Hill) の『本草書』——を読むことから始めた。彼は早起きをし、仕事に就く前に勉強をした。15歳の時に彼は神学に

¹⁹ これは1852年4月に始まっており、週刊分冊で、以来多くの版を重ねている。

W.E.Adams は、前掲書、第1章、113ページで、自分の本が最初に世に出た時、この作品から受けた助けについて述べている。

²⁰ *The Unfortunate Genius, a Factory Girl*(Armley,1852)著。この匿名の小冊子は、‘The Factory Girls of England’に献呈されたものだが、Israel Holdsworth of Hall Lane, Armley, Leeds によって印刷された。‘Unfortunate Genius’の正体については何の手がかりも与えられておらず、序章は彼は自身の歴史を書くということについて説得させられることが出来ず、著者は彼の物語を彼が口頭で述べるように書き留めたということを解説している。

夢中になっており、メソヂストのクラスミーティングの一員となっていた。そして節約できるお金はすべて（それにも増してしばしば借金をしてまで）本に費やしていた。本や勉強に対する彼の傾倒ぶりは他のあらゆるものに優先し、生計を立てるために稼ぐ必要性にさえも優先した。順次、本屋、事務員、食料雑貨店主、そして教師となり、彼はついに一財産を作るためにアメリカへ移住したが、5ヵ月後、一文無しで戻ってきた。

これらの自己教育をした労働者たちの回想録に書かれている共通の経験は、成人教育活動を組織しようとするすべての試みに直接的に関連する、労働階級の教育的努力の一つのパターンを明らかにしている。それはスマイルズ主義者に対する根拠と、中産階級の自助への解釈と、独立した労働階級の成人教育という伝統のための根拠とを同時に提供した。そのパターンの筋道は、殆どのケースにおいて極めて類似していた。不十分な学校教育は、通常、読み書きに対する能力を取得することなく、可能性がかすかに現れるだけで十分とされた。それから、読み方の練習には、たとえそれが不適切なものであっても家にある本だけを頼りにした。そして最終的に神学、数学、そして諸言語に頭から突入するというものであった。本の選択において殆ど何の手引きも無く、より平易なものからより複雑なものへ系統的に進行していくということも考えつかないまま、独学の職人は自力で支援の無い努力をして自分自身の達成水準を得なければならなかった。そんなにも多くの事例において、彼が、哲学、神学、科学、そして政治経済学という難解で古典的な作品に首尾よく突入したということ——そしてしばしばそれらを同時並列的に学習したこと——は、19世紀の労働諸階級の一定の小集団の良質な知性を証拠づけるものである。知的能力と同様に重要なものは、労働階級の人々の生活と労働の状況の只中であって家庭学習という重荷を担うために必要な精神的気力であった。メソヂスト運動との接触がこの行動形態における傑出した命綱であり、そして、非国教徒の精神的強さと熱心さが、古きイングランドの人々の古典とも言うべき聖書とバニヤンに由来する伝統を強化した。

労働諸階級の間での自己修養というこの伝統の諸成果は様々な形で観察可能であった。エンゲルスは「使用に耐えないような粗末な衣服を纏った労働者たちが、地質学や天文学やその他の主題について豊かな知識を用いて話すのをしばしば聞いた」ものだった²¹。職人博物学者は19世紀のランカシャとウェスト・ライディングの多くの地域において見慣れた姿となった。ハリファクスとトッドモーデンはそのような人たちがとりわけ大勢いた。植物学、地質学、昆虫学、貝類学に対する関心は広く行き渡っており、地方の労働者たちは化石、昆虫、植物、苔類のコレクションを作りあげた。トッドモーデン博物学協会は1828年から1843年まで大いに栄えた。そして1852年にトッドモーデン植物学協会がアブラハム・スタンスフィールド (Abraham Stansfield) とジョン・ノウエル (John Nowell) によって設立された。後者 (職業は「撚手」) は地元の苔類の専門家であった。サミュエル・ギブソン (Samuel Gibson) (1790-1849) はヘブデン・ブリッジのブリキ職人で評判の地質学者であり、新種の貝の化石を発見し、私設の博物館を設立した。ハーレー・ヒル労働者コレッジ (ハリファクス) の科学協会は1860年頃、オーベンデン博物学者協会は1865年に創立された²²。

²¹ *Condition of the Working Class in England in 1844* (1892 edn.), p. 239.

²² Some of the local literature on this subject is listed in J. Horsfall Turner, *Halifax Books and Authors* (Brighouse, 1906). See also J. Holden, *Short History of Todmorden*

それ以上に広く見られたのは職人詩人であった。19世紀の地方の詩歌の数は歴大である。そのほとんどは平凡な出来栄であり、地元で自費出版された小さな本や、地方の新聞や雑誌の中に見出される²³。ジョン・ニコルソン (John Nicholson)、ロバート・ニコル (Robert Nicoll)、ジョージ・リナウス・バンクス (George Linnaeus Banks)、トマス・リスター (Thomas Lister) といったヨークシャ詩人たちの作品が非常に広く知られるようになった。しかしそれより水準の低いものでは、ウィリアム・ヒートン (William Heaton)、ジョン・アクロイド (John Ackroyd)、トーマス・ブラックカー (Thomas Blackah)、ルーシー・リーディング (Lucy Reading) など多くの人たちの名前も見られるが、彼らの近隣地域外には決して知られるようにはならなかった。

(1912), pp.204-5.

²³ See William Andrews, *North Country Poets*, 2 vols.(1888-9) , and Abraham Holroyd, *A Garland of Poetry; by Yorkshire authors, or relating to Yorkshire* (Saltaire, 1873).